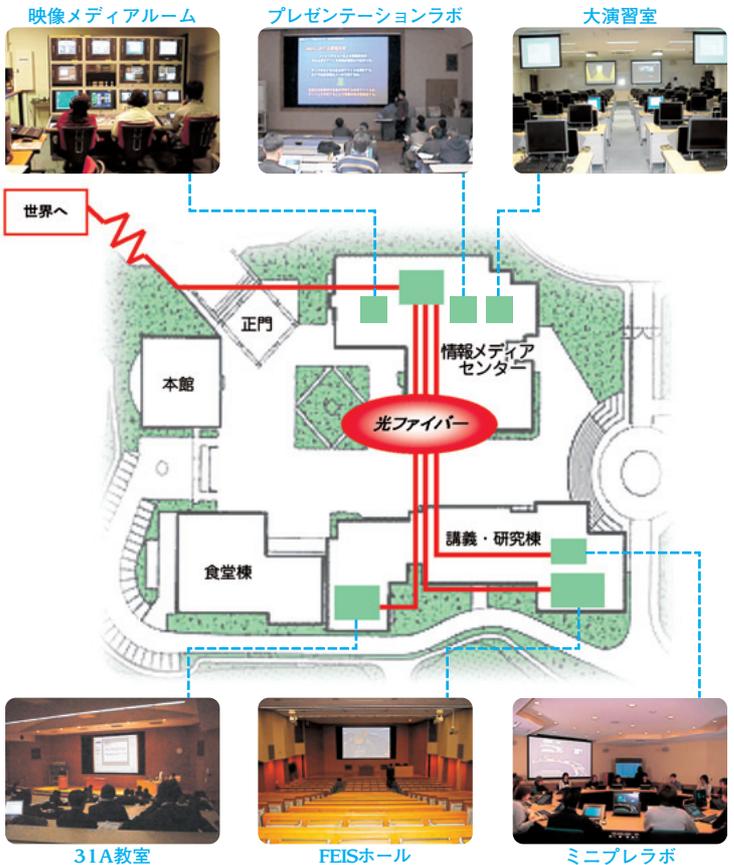


2月 サイバーキャンパス整備事業始まる

環境情報学部では、ITによる教育研究環境の充実に向けた取り組みの一環として、2003年度、文部科学省が海外大学等との教育研究交流のための遠隔教育環境整備等を目的とする「サイバーキャンパス整備事業」に対する助成金申請を募集し、採択されました。具体的には、①オーストラリア熱帯雨林復元フィールド教育プログラムの共同開発と運用、②持続可能な発展のための環境教育モジュールのカトマンズ大学等との共同開発と運用、③武漢大学との日中横断空間情報の共同構築および応用研究を展開していきます。そのために、映像・音声遠隔受配信装置などのマルチメディア装置や1秒間に1ギガビットを伝送できる高速光ファイバー等のLANを2004年2月に導入し、同年4月から運用を開始しました。



バーチャルスタジオを用いた電子教材を開発

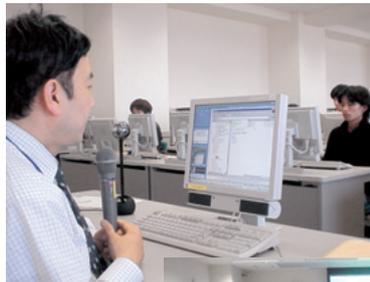
2004年2月、ネパールのトリブハン大学からガンガ・ガータム先生を本学に招待し、講演会を開催すると共に、後藤、ブッシュル両助教授のもと、バーチャルスタジオシステムを使った教材開発を行いました。バーチャルスタジオは、PCで作成された3Dのバーチャルスタジオ内に教員や学生の映像をリアルタイム合成し、魅力あるコンテンツを作成する仕組みです。ガンガ先生の講義と共に本学学生とのQ&Aなどを盛り込んだ電子教材を作成しました。シナリオの構築や撮影などの準備はネパールプロジェクトの学生チームが担当し、情報メディアセンター職員、業者の協力のもと、バーチャルスタジオシステムを使った本学初の教材を完成させました。この教材は現地で披露したカトマンズ大学とフォレストリ大学において極めて高い評価を得ています。

完成したバーチャルスタジオコンテンツの一部

ネパールのフォレストリ大学での共同研究会のようす：ここでバーチャルスタジオコンテンツを披露し、非常に高い評価を受ける

4月 教室間連携による演習授業を開始

環境情報学部では、学内の各演習室をLANで連携し、遠隔講義システムによる教室間連携演習授業の取り組みを開始しました。以前は演習室規模の制約のため1コマの授業当りの受講生にも制限があり、多くの学生が希望通り履修できませんでした。今回のシステムでは、LANを介した教室間連携演習授業の開講によりほとんど全ての履修希望生を受け入れることが可能となりました。教員の講義映像はWeb Conference Serverというシステムを使って最大4教室に配信され、40~70名規模の演習室間で映像と音声の双方向通信が可能です。これにより、他教室の学生の進捗状況を教員が確認しながら演習講義を進めたり、学生の質問に教員が答えたりすることができます。2004年度は「JAVA演習（横井助教担当）」と「C,C++演習（後藤助教担当）」の授業を中心に、同時に4演習室で教室間連携による演習講義を開講しました。



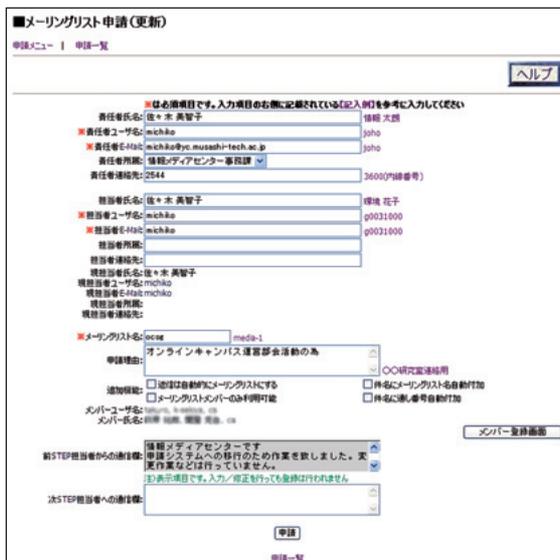
横井助教による遠隔講義システムを使った授業のようす



講義受信側教室での演習のようす

6月 オンライン申請・決裁システムの運用を開始

情報メディアセンターが利用者へのサービスとして行っている、メンバーリスト作成やグループホームページ登録などを受け付ける申請・決裁する業務について、従来Wordの申請書に入力しメール添付等で受け付け、捺印で決裁していたものをWebベースのオンライン申請・決裁システムに移行しました。それにより利用者の利便性の向上、申請処理の効率化・スピード化、申請内容のデータベース化による維持管理の効率化が実現されました。



メンバーリスト申請画面の例

7月 キャンパス見学会で情報メディアセンターを公開

2004年7月30,31日に行われたキャンパス見学会では、授業で作成したホームページや3Dソフトで作成した課題の展示や演習室の公開を行いました。来場者の対応をしたのは主に学生です。情報系授業でもアシスタントとして活躍している彼らは、システムに詳しいだけでなく本業の学生として、キャンパス生活などアドバイスを行いました。映像メディアルームではバーチャルスタジオを使い、実際にバーチャル空間を体感したり、LL教室では、CALL授業で実際に使用している英語学習ソフトを用いた、音声認識によるスピーキング学習などの体験授業が実施されました。



バーチャル空間の体験（映像メディアルームにて）



語学ソフトの体験（LL教室にて）

8月 演習室等の大規模リプレイス

2004年8月に情報メディアセンター内の各演習室やLL教室のPC、約250台のリプレイスが行われました。処理能力の高い最新機種への機種変更により、画像処理や映像処理、3D演算や統計処理などの授業でも、ストレスのないスムーズな授業が行えるようになりました。また各種メディアにも対応できるよう、DVDドライブ（DVD±R/RW、DVD-ROM）、6種類対応カードリーダー等を備え、ユーザの利便性を図っています。またクライアントPCと各種サーバーがギガビットネットワークで接続され、大容量のファイル転送の高速化が実現されました。



◀ 情報処理演習室(2)

▶ メディアホール：学生管理グループにより操作しやすい形にレイアウト変更を実施



情報系各研究室、科学体験教室へ初出展

夏休みの1日を使って、小学生・中学生を対象に、さまざまな実体験を大学で楽しむことで、科学的な関心をもってもらうという企画の第三回になる今回は、60テーマで、本学75周年行事の一環として、世田谷キャンパス桜ホールで盛大に行われました。IT関連のテーマを強化しようと、本学部情報系研究室から、「ロボットとCGの連携動作」（奥平研究室）、「デジタル染色技術」（後藤研究室）、「レゴロボットの組み立て」（小池研究室）、などが初出展されました。実際に自分が関わってコンピュータ機器やロボットが動くことを体験することで、ゲームに慣れた子供たちにとっても新鮮な驚きを感じたようです。



ロボット（手前）を操作する子供たちのようす

9月 高校の「情報」科目の教員免許取得に向け、初の教育実習を開始

創設3年目となる情報メディア学科では、2004年9月から、同学科の教職課程3年生による教育実習がはじまり、11月末までに5名の学生がそれぞれ2週間の実習を無事おえました。実習前の9月4日、小池、高山両助教授の指導のもと、教育実習の事前指導会が行われました。学生が模擬授業を行い、教職課程の教員の指導を受けて実習に備えました。今回の実習生のうち3名は、自分の母校において実習を受けましたが、2名の女子学生は、母校ではなく、長野の武蔵工業大学第二高等学校において実習を行いました。実習期間中は教員宅にホームステイをして、実習指導も含め生活全般についてお世話になり、大変密度の濃い教育実習になりました。



教育実習事前指導会のようす（大演習室）

9月 中国・武漢大学との遠隔授業を開始

サイバーキャンパス事業の一環として、本学75周年を迎えた2004年9月27日より、本学大学院環境情報学研究科（横浜市）と中国武漢大学（湖北省武漢市）の電子情報学院との間で、大学院生を対象としたリアルタイムの遠隔授業が始まり、歴史的な一ページが開かれました。本学側は史助教授が担当しました。国を超えて遠隔授業を行うには、言葉をはじめ、通信、時差、授業科目などの様々な壁を乗り越えなければ実現できません。

今回は、両大学の数多くの関係者のご協力を得ながら、スムーズに遠隔授業を行うことができました。たとえば、映像と音声はPolycomという機器を、パソコン画面はWebconferenceというソフトを使い分けることにより、映像・音声・画面とも質よく転送できる方法や、英語とそれぞれの母国語での授業を一週間程度おきに行うことで、英語の内容は授業のときで理解ができなくても母国で理解・消化できるチャンスを与えることなど、様々な試みが行われました。



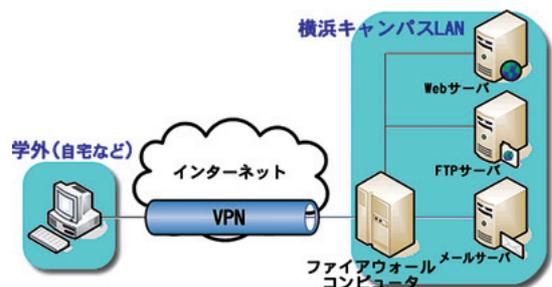
中村新学長も参加した遠隔授業のようす
(スクリーン内は武漢大学側の映像)

10月 VPN (Virtual Private Network) サービスを開始

自宅のパソコンにVPNクライアントソフトをインストールすることによって、ISP（インターネットサービスプロバイダ）を経由し、従来ファイアウォールで利用できないようにしていたキャンパス内と、同等のサービスが安全に利用できるようになりました。

vpnのサービスとしては現在、学内のメールサーバを利用したメールの送受信、学内でのみ閲覧可能だったWebページの閲覧、ftp通信が利用できます。

VPN [Virtual Private Network]（仮想プライベートネットワーク、仮想私設網）とは、インターネットを利用し、認証・暗号・カプセル化の技術によって仮想的に安全なプライベートなネットワークを作ることです。



VPNにより自宅のPCがあたかも
横浜キャンパスLANの中に見える

12月 修士1年生「英語プレゼンテーション」を実施

2004年12月、大学院の英語教育改善を検討するワーキンググループが教員有志で結成され、数回の議論の結果、修士1年生を発表者として、年に2回国際会議を模した発表会を行うこととなりました。これを受けて、英語担当のプール、吉田両助教授の指導の下、29名の修士1年生が7月と12月にプレゼンテーションラボにて英語で発表を行いました。持ち時間は各4分間、パワーポイントの資料を使って、修士課程での研究の進捗状況などについて発表しました。皆、発表もそれに続く質疑応答も見事に英語でこなし、会場からは、学生の努力と成果を称える声が数多く聞かれました。会の成功は、明確な目的が与えられれば、研究について英語で説明し、質問に答えるという一見難しいタスクでも達成可能なこと教えてくれました。



質疑応答も英語で行われた